

AJELC Newsletter

The Association for Japanese and English Language and Culture

第65号 2023年5月1日

		---目次---			
巻頭言	鈴木 誠	1	第 82 回例会報告	仲 潔	10
会長つれづれ考	小川 貴宏	3		近藤 公哉	11
第 81 回例会報告	アシュール 真弓・			川崎 つぶら	13
	堀 由紀	5	事務局だより		15
	根本 貴行	6			
	拝田 清	8			

英語ユーザーモデル

鈴木 誠

私は以前、中学高校教員英語スピーチコンテストに出場し、“The dilemma between an English user and an English teacher”（英語使用者と英語教師との狭間で）という演題でスピーチをしたことがあります。スピーチでは、自身が高校時代から続けてきた英語スピーチとかつての勤務校での授業を振り返り、英語教師は英語の指導者であると同時に学習者にとっての英語ユーザーモデルであるべきであると主張しました。このスピーチ原稿を書き始めるときに George Braine 氏が著した *Nonnative Speaker English Teacher* に出会い、自身の思いに確信を持つことができました。

この本は、非英語ネイティブスピーカー

である教員が英語指導において直面する現実やジレンマについて様々な視点から述べています。例えば、理想的な言語教師はネイティブスピーカーであるべきであるという“the native speaker fallacy”に言及し、多くの非英語ネイティブスピーカー教員が英語の知識やスキルにおいてネイティブスピーカーに劣ると考え、自身は英語教師として不適格であると考えてしまうことを指摘しています。しかし、George Braine 氏は、著書の中で Andrews (2007) の“Teacher Language Awareness” (TLA) という 3 つの knowledge (Knowledge of language, knowledge about language and knowledge of students) の考え方を引用し、非英語ネイティブ教員は 3 つの

内、後者2つの knowledge において英語ネイティブ教員よりも優位な立場にあることを示しています。1つめの knowledge of language は言語運用スキル、2つめの knowledge about language は文法や語法等の宣言的知識、そして3つめは同じ第一言語を共有する生徒の学習の進捗状況等を把握できるといった学習者理解を指します。

Andrews の指摘は、非英語ネイティブ教員こそが、教員自身の英語学習体験も踏まえ、目の前の学習者が何の理解に苦しんでいるのかを把握しつつ、英語の文法や語法、歴史等を説明できることを示唆しています。また、第一言語である日本語との比較から英語の文構造や、ニュアンスの違い等にも触れられるかもしれません。非英語ネイティブスピーカー教員の役割についての認識を新たにしました。

また、George Braine 氏は、非英語ネイティブ教員としてのあるべき姿を次のように述べています。

As professionals, English teachers know the power of language acquisition as opposed to learning. In order to acquire a language, they must read widely, speak the language at every opportunity, participate in conversations, and watch TV and movies. They preach

this to their students and their children, continually reminding them of the importance of exposure to English. But, many of them rarely buy and read English newspapers or magazines, or read a novel or a non-fiction book for pleasure, or watch an English movie. Simply stated, they do not practice what they preach.

私は生徒に英語学習の方法を説いているように、私自身も日常的に十分に英語に触れているでしょうか。生徒の英語学習の、そして英語ユーザーとしてのロールモデルになっているでしょうか。昨今、高校現場でも浸透しているアクティブラーニングや協調学習という授業形態において、私のモデルを示さず生徒に英語でディスカッションをさせていないでしょうか。生徒の表現したいメッセージの意図を汲んで英語を言い換えるなど手を差し伸べているでしょうか。

今回の巻頭言を担当する機会をいただき、改めて英語教師としての役割、そして英語ユーザーモデルとしての在り方について考えさせられました。

(埼玉県立和光国際高等学校
外国語科教諭)

会長つれづれ考**AIについて思うこと****小川 貴宏**

最近話題になっているものに、「チャットボット」なるものがある。極めて大ざっぱに言うと、「(「チャット」=会話) + (「ボット」=ロボット、自動機械) で、音声や文字で何かを尋ねたりお願いすれば、それに答えて(あるいは応えて)くれるプログラムである。

最近企業がカスタマーサポートに人員や予算を割きたくない、あるいはクレーマーに接するのを避けようとあからさまにそちらに誘導しようとしてくるカスタマー対応のチャット(サービス)もその1つだし、OK Google (正式名称は Google アシスタント) や Apple の Siri も広い意味でチャットボットだと言えるらしい。

だが、最近著しい進歩を遂げ、ニュースにもなったのは、高度な AI を使ったチャットボット、ChatGPT で、これは非常に高度な言語生成能力を備えているといわれる。たとえば大学で何かレポートの課題が出たとすると、「〇〇について調べてレポートを書いてくれ」と ChatGPT にお願いすれば、インターネットのあちこちから情報をかき集めてきてくれて、非常に「それらしい」文章を生み出してくれるらしい。この ChatGPT があまりにも優秀なため、米国のニューヨーク市(教育局)は、学校における教員や生徒の ChatGPT の使用を禁止したそうである。

ChatGPT はイーロン・マスク氏らも出資する OpenAI という人工知能研究開発期間が開発し、昨年(2022年)11月に一般公開

されたリソースで、登録さえすれば誰でも利用でき、日本語での質問にも答えてくれる。公開後2か月でユーザー数が1億人を超え、先日 Microsoft が100億ドル(1兆円以上!)を ChatGPT に投資することを発表したことでも話題になったようだ。

とある Web 上の記事

(https://aismiley.co.jp/ai_news/chatgpt-tsukattemita/)によると、数学やプログラミングの質問にも答えてくれ、また「小説の続きや台本の作成といった文章生成や、テキストの要約や翻訳なども可能」だとのこと。教育関係者が警戒するのもよくわかる。(この記事には、ChatGPT がしりとりルールを知らず頓珍漢なやりとりになった件とか、具体的な ChatGPT の対話例なども多少書かれているので、興味がある方は読まれるとよいかもしれない。)

特にインターネットが普及してきた頃から、レポート作成に関してネット上の情報(特にウィキペディアなど)のいわゆる「コピペ(丸写し)」が問題になったり、学生が図書館に行かずもっぱら Web 上で情報収集しレポートやプレゼン資料を作成したりすることが取りざたされてきたが、それらに関しては「コピペ」なので、Web 上の情報と比較して見抜くツールもあるらしい。ただ、たとえば ChatGPT がその言語生成能力を駆使して学生の質問に応える形で生み出した文章を何らかの形で見抜けるかどうかは、現段階では疑問である。今のデジタルネ

イティブである小中高生、そして大学生は、我々からするとデジタルツールを異次元レベルで「使いこなして」しまうので、私のようなアナログ教授よりもずっと「情報強者」なのである。一方、最近とみに大学教育で **critical thinking** が声高に叫ばれるようになっているが、今の若者が検索・翻訳ソフトにせよ、あまりにも便利なデジタルツールを過信して、出てきた情報をそのまま鵜呑みにしてしまうというところがその一因にあるのかもしれない。

最近の **deep learning** に基づいた AI の自動進化はとどまるどころを知らないらしい。私が AI やデジタルツールの進化に関して最近興味や関心、あるいは危機感を持っているのは、①以前にも少し書いたが、学生の英語学習の **motivation** にどれほどの影響を与えるか。音声ベース、文字ベースで瞬時に訳してくれる自動翻訳アプリがあれば、英語を学ぶ必要性は果たしてあるの？と学生が考えるかもしれないこと。②自動翻訳が進化して、たとえば文学作品などをどれほどうまく機械が訳してくれるのかということ。また、現在（文字数の制限が厳しい）映画の字幕などは職人芸で人間の字幕翻訳者の方々が訳されているそうだが、それらを機械翻訳に果たして置き換えられるのかどうか。（ニュースや動画などは、すでに自動生成の翻訳字幕が付けられていますね。）非常に単純なところでは、**double meaning** を持たせたセリフや **pun** などはおそらく機械

はどちらかの意味だけでとらえ、面白くも何ともない訳をひねり出してくるのではないだろうか。③現在のところ、Web 上の **dynamic** な辞書を除けば、辞書は人間が編んでそれをある時点で固定（ROM化）して次の改訂までの1つの版とするが、Web 上の言語行動（これは実は非常に偏っているのだが）を **deep-learn** して将来辞書が自動生成できるようになるのかどうか、といったところである。

もうずいぶん前に一時的に流行した言葉で（「〇〇は最強」という意味で）「〇〇しか勝たん」という表現があったが、試しに「AJELC しか勝たん」というフレーズを Google 翻訳や DeepL という Web 上の翻訳ツール（日→英）に入れてみた。

Google 翻訳：Only AJELC can win.

DeepL 翻訳：AJELC is the only winner.

AJELC is the only one that wins.

Only AJELC wins.

AJELC only wins.

意図は伝わるのかもしれないが、「〇〇しか勝たん」が持つニュアンスがそうした英語の表現で果たして伝わるのかどうか。囲碁の世界では、AI がすでに世界チャンピオンを打ち負かすレベルに達しているそうだが、翻訳の世界では（スピードは別として）まだまだ「人間しか勝たん」という状況であってほしいと願うところである。

（成蹊大学教授）

第 81 回定例研究会報告

2022 年 12 月 10 日（土）14:30 – 17:00

於：成蹊大学 と Zoom ミーティングでのハイフレックス

研究発表

外国語活動・外国語科と国語科の連携を視野に入れた ローマ字指導の一考察

アシュール 真弓・堀 由紀

筆者らは「英単語が読めない」という児童たちに、ローマ字の読み書きができないという共通点があることに着目した。そこでローマ字を使い指導してみたところ変化が見られたことから、ローマ字学習は、英語学習の補助になるのではないかと仮説を立てた。小学校外国語活動・外国語科と国語科が連携することで、児童たちのローマ字と英語への理解が今より容易になるのではないかと推測している。

(1) ローマ字学習の英語習得に対する効果

英語学習に対する自信の低下が見られる児童には、心理的負担を軽減するため、英語と同じラテンアルファベットを用いたローマ字を使うことで、英語学習の一助となることがある。ローマ字を利用した指導では、児童たちの英語学習への意欲回復に繋がることが確認できた。

筆者（アシュール）は 2 段階に分けて指導を行った。

第 1 段階：ひらがなの分割。ひらがなを子音と母音に分ける作業を行う。

第 2 段階：子音と母音が混ざること、1 つの音になる概念を理解させる。

指導後に、児童たちに自主的に簡単な英単

語を読んでみようという変化が見られた。

筆者（堀）は日頃行っている英単語の書き取りテストで、綴りの覚え方について聞き取り調査を行った。児童 A は、心の中でマガズィネと唱えてから、英語で magazine と書いたが読みテストではマガズィネとは読まないことから英語学習の補助となっていることが確認することができる。

(2) 外国語活動・外国語科と国語科の連携

ひらがなは子音と母音が組み合わさった文字であり、ローマ字では子音と母音に分ける指導を行う。音を混ぜる、音を分けるという概念は、英単語の読み書きにも求められるものであることから、国語科で育てる言語への感覚や意識が外国語学習に繋がると期待される。

外国語活動・外国語科では、ローマ字読みが、英単語の読み書きの補助や発音記号の習得の橋渡しになる可能性がある。このことから、外国語活動・外国語科と国語科のローマ字指導の連携が相互の学習の効果を高めるのではないかと考える。

(3) ローマ字を学ぶ意義

①ローマ字の知識を使って読むことがで

きる言語がある。

(トルコ語、インドネシア語、スペイン語など)

②日本語を他言語に訳すことなく海外に発信できる。(sushi, anime, kabuki など)

③日本語の特徴や英語との違いに気づくことができる。(日本語の音の構造、動詞の活用、品詞)

(4) 外国語活動・外国語科と国語科の連携の提案

ローマ字学習前に、外国語活動でアルファベットの名前の読み方と音の指導を行う。ローマ字学習では、子音と母音の音声を用いたローマ字指導を行う。その際ローマ字と英語の違いの説明を行う。ローマ字学習後、外国語活動においてローマ字の知

識を使って読める身近な英単語の導入を行う。

(5) 今後の課題

ローマ字と英語の違いを明確にする説明方法を考案する。外国語活動・外国語科と国語科の具体的な連携方法が示されたシラバスを作成し、指導実践及び効果測定を行う。ローマ字指導の連携が円滑な音声から文字への学習なるように、研究を継続する。

(和洋女子大学大学院科目等履修生
2023年4月より
和洋女子大学大学院修士課程1年)

研究発表

be 動詞と一般動詞の疑問文の相違について —統語論・母語獲得の考察を基に、 ラベル付けアルゴリズムから主要部移動を考える—

根本 貴行

本発表では、be 動詞と一般動詞の疑問文の違いを統語論における LA (ラベル付けアルゴリズム) によって説明を試みた。

be 動詞の文では、be 動詞が V の位置から T を経由して C へ主要部移動することで疑問文が派生される。一方一般動詞は V から T には移動せず、その代わりに T に補助動詞 (do) が挿入され、これが C に移動することで疑問文となる。統語論では、疑問文は T にある要素が C に移動することで派生され

ると考えられており、be 動詞と一般動詞の疑問文の違いは、動詞が T に主要部移動するか否かに還元される。

文法の解明には母語獲得の過程の説明が必要であるという「説明的妥当性」を考慮した場合、この主要部移動が極めて早期に幼児に獲得されるという事実は興味深い。

幼児はより容易な (コストのかからない) 文法操作から使用できるようになるという「母語獲得における経済性の原理」(根本

2017 他) を仮定すると、主要部移動は 24 か月までには一様に使える操作であることが観察されている (Deprez and Pierce 1993) ことから、この操作は極めてコストのかからないものであると仮定される。ちなみに、A 移動と言われる操作はコストがかかり、この操作を含む受動文の発現は遅いことが広く知られている。

本発表では、be 動詞と一般動詞に見られる主要部移動の有無は、Chomsky (2013) の LA から何らかのヒントが得られるのではないかと考えた。LA とは、言語は統語要素が融合した際のラベルを決定する機能を有しており、ラベル位置 (節点) からの主要部の最小探索と素性共有によりラベルが決定されるものであると規定されている。

一般動詞が V から T に移動するとすれば、T と動詞が持つ ϕ 素性の共有が要求される。例えば、T が「1 人称・単数」の ϕ を有する場合、動詞 ‘eat’ は「1 人称・単数/複数、2 人称・単数/複数、3 人称・複数、 ϕ なし (原形)」という 6 種類の素性を潜在的に持つため、一致素性をこの中から探索しなければならない。一方 be 動詞が T に主要部移動する場合、T が「1 人称・単数」の時、

‘am’ は「1 人称・単数」を有し、ラベル探索が容易なため主要部移動が生じる。

このことから、動詞が ϕ 素性ごとに屈折変化をすれば、動詞の活用形態が T と一致しやすく LA が容易であることが予測される。実際、フランス語やドイツ語、中英語など、動詞の変化が複雑な言語では要部移動を起こしている。一方、動詞の屈折変化が乏しい中国語では、一つの動詞形態が持つ ϕ 素性が多く、主要部移動の際、LA のコストがかかることになり、主要部移動は生じない。

お気づきの通り、この考察には多くの問題があり、一般動詞が 3 人称・単数 (現在) の場合、例えば ‘eats’ は一つの ϕ 素性をしか持たず、主要部移動を起こすことが予測され、一方 ‘are’ は複数の ϕ 素性を有することから主要部移動が生じないことを予測してしまう。さらに、一般動詞でも主要部移動をするイギリス英語の本動詞としての ‘have’ に関してなど、他にも問題は山積している。

(東京家政大学准教授)

講 演**英語教育におけるユニバーサルデザインを考える
－誰も排除されない教育を目指して－****栢田 清**

今回、ここ7年程、細々とではありますが関心を持っている「英語教育のユニバーサル・デザイン」についてお話をさせて頂く機会を頂き、心より感謝申し上げます。つたないお話ではありましたが、多くの会員から温かいお言葉を頂戴しました。この場を借りてお礼申し上げます。

さて、「ユニバーサル・デザイン (Universal Design, 以下「UD」)」とは何かと申しますと、老若男女や妊婦、外国人、障がいの有無を問わず、誰もが利用できる施設、制度、サービス等を設計の段階から念頭に置いたデザインと定義できるでしょうか。「バリア・フリー」との違いは、すでに出来上がっているシステムや施設などから、問題点を取り除くのが「バリア・フリー」で、設計段階からすべての人が使いやすいように考えるのが「ユニバーサル・デザイン」と言えます。

それを踏まえて「英語教育のユニバーサル・デザイン」とは何かといえ、UDの理念・手法を英語教育に導入・採用し、誰にとっても学びやすい環境を整えることを目指すこと、言い換えれば、「誰も排除しない英語教育」の実現を目指すという言うことになるでしょう。

2017 (平成 28) 年、「障害者差別解消法 (正式名称は「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」)」が施行され、公教育ではインクルーシブ教育が標榜さ

れていますが、三浦朱門 (元教育課程審議会会長・元文化庁長官) 氏の「できんものはできんままで結構」という発言や、萩生田光一 (元文部科学大臣) 氏の「身の丈に合わせて...頑張る」といった発言に象徴されるように、崇高な理念と並行して、前時代的なエリート主義や差別意識が依然として為政者や政策策定者に存在することも事実です。「ことばは世界をつなぐ平和の礎」であるべきなのですが、我が国の外国語教育、とりわけ英語教育は、エリート選別の一手段として機能してきた側面があることは否めません。その意味で、誰も排除されない外国語 [英語] 教育を目指していくことは、言語教育に関わる人間として最重要の課題であると認識しています。

今回の講演では、英語教育のユニバーサル・デザイン研究のなかでも、とりわけニッチなテーマについてお話をさせて頂きました。軽中度の知的障がいを伴い、口腔の形状に特徴があるために発話自体が不明瞭になると言われているダウン症者に対する英語教育の研究について、現状報告をさせて頂きました。結論としては先行研究はなく、母語の構音指導などといった隣接領域での知見を援用して研究をすすめている、ということになります。本稿を書いている時点で、CiNii で「ダウン症、英語」で検索をかけるとヒットするのは1件

のみ、すなわち拝田(2019)のみのままです。

とはいえ、ダウン症者が英語に取り組むという数少ない事例を見ているだけでも、ダウン症者と外国語活動は親和性が高く、知的・情的な発達に寄与するのではないかという期待があります。ここ数年はCOVID-19の感染爆発という社会情勢もあって、ダウン症児を集めての英語指導の実践はほぼできていないこともあり、本当

に報告できる内容は薄かったとは思いません。ただ、ダウン症女児の父親でもある講演者としましては、「障がい」は不便であることは多いですが、けっして「不幸」ではないということを皆様にお伝えできたことを望外の喜びとしております。本当にありがとうございました。

(和洋女子大学教授)

第 82 回定例研究会報告

2023 年 3 月 11 日 (土) 14:30 – 17:00

於：成蹊大学 と Zoom ミーティングでのハイフレックス

講 演

「多様な英語」とのつき合い方 —英語教育の立場から—

仲 潔

1. 英語教育の立場と英語の多様性

「対話の平等性」という観点からすれば、異言語話者同士の対話では、対話の参加者が互いの母語／第 1 言語を使用することが理想的だ。そのためには、自動翻訳の活用や、あるいは通訳者を帯同することになる。現時点での自動翻訳の技術的限界や通訳者を雇う経済的な負担を考慮すると、最も広範に学ばれ、使用されている英語を用いることは選択肢の 1 つになる。その際、英語の多様性を積極的に認め、活用する方が、標準英語のみの場合と比べると多少は平等だ。結果として生じる「多様な英語」と、英語教育者としてどのようにつき合っていくべきだろうか。

2. 多様な英語への基本的な姿勢

私たちの言語は常に変化し続けている。言語は「乱れ」が常態だ(「気の置けない仲」の意味の変化など)。また、他者の言葉遣いに対する人々の受け取り方も変化し続けている(「お茶を淹れました」という発話の受け止め方など)。ことばは本来、人と人とを結ぶことが期待されているが、正しさに固執すると、その逆に分断をもたらす危うさ

がある。

そもそも、同じ言語を用いても、互いが分かり合えるという保証はない。互いの言いたいことが伝わらないのであれば、言い換えたり説明をしたりして、協働的に発話の意味を構築することが望まれる。その際、互いの言語文化の影響を受けた表現である場合がある。それは、「間違った英語」ではなく「多様な英語」である。そういった表現を「味わう」姿勢は、他者の言語文化を理解するきっかけとなる。

3. 多様な英語を味わう

英米英語では、“He has a bitter tongue.”と言ったりする。この表現を「正しい英語」とするならば、“He has a wide face. (彼は顔が広い=よく知られている)”が「誤った英語」であるとするのは不平等だ。こうした言語文化の影響を受けた英語表現の事例は非常に多い。もちろん、互いに通じない場合もある。その場合には、互いが発話の意味を確かめ合いながら対話を進めればよい。このことは、異言語であろうと母語であろうと同じだ。

4. AI と多様な英語

ICTの進展により、容易に「多様な英語」の実例を収集することができる。例えば、対話式AIに「Singlishの事例を教えて」と指示すれば即座に提示してくれる。それをPlain EnglishやStandard Englishで言い換えることも可能だ。提示された表現を鵜呑みにしないよう留意しつつ、科学技術の発展を享受し、英語学習や英語の授業づくりに活かすべきだろう。

5. おわりに：ICT時代における「多様な英語」とのつき合い方

英語が多様な姿を持つことは、自然な現象だ。したがって、他者の「多様な英語」を味わい、そこから言語文化への理解を深め

ようとする姿勢が求められる。また、互いの言いたいことが伝わらないこともある。その場合には、対話を通じて協働的に発話の意味を構築していけば良い。対話を成立させるには、互いに責任があるからだ。

多様な英語を味わい、対話を通じてわかり合うには、互いを尊重し合うことが不可欠だ。つまり、他者（言語文化を含む）に興味を持ち、興味を持ってもらおうとする姿勢だ。多様な英語とICTの進展を念頭に置いた場合、他者に伝えるべき内容を持ち、それを伝わりやすく表現しようとする姿勢や技能の育成が、英語教育には求められるのではないだろうか。

(岐阜大学准教授)

研究発表

英語学習者が産出する二重目的語構文の句の長さと言語構造の関係 — 日本語母語話者の英語学習者コーパスを用いて

近藤 公哉

学校現場では、I gave him a bookのような二重目的語構文(以下DOC)を、I gave a book to himのような与格構文(以下DC)に書き換えが可能だと指導される場合がある。しかし、それぞれの構文に文法上様々な制約が働くため、書き換えが可能とは限らない。

特に、談話的制約について福地(1985)や久野・高見(2005)では、英文の情報構造は旧から新へ配列されるとした上で、DCはその情報構造に関わりなく「与えた物」を直接目的語句(以下DO)に、「与えた人」を前

置詞to以下に置き前置詞句(以下to句)を形成する構文とした。一方、DOCは話し手が間接目的語(以下IO)は旧情報を、直接目的語が新情報を担うように意図的に配列した構文であるとしている。

DOCの情報構造と目的語句の長さの関連についてBiber et al.(1999)は、英語母語話者が産出する二つの目的語句は、旧から新へ配列され、DOがIOより長くなり、IOの50%に代名詞が使用されているため、情報の比重はDOに置かれると報告した。

また、英語学習者については、小川 (2022) や Park (2011) の報告から、DOC の二つの目的語句の情報構造は旧から新へ配列され、IO に代名詞が多用されている事から、IO が 1 語での使用が多い事が示唆された。しかし、二つの目的語句間の情報の比重に関してや、IO への代名詞の多用の要因については明らかではないが、実験の内容やコーパスタスクが影響している可能性が考えられる。

そこで、本研究は、日本語が母語の英語学習者を対象に、DOC の DO が その IO より長くなり、情報の比重が置かれるのか。また、DOC の IO への代名詞の多用の要因はコーパスタスクの影響を受けているか検証を行った。

使用コーパス及び調査対象は、英語学習者と試験官の発話を収録した、The NICT JLE Corpus (和泉・内元・井佐原, 2004) の SST レベル 8 と 9 の学習者の絵描写課題・ロールプレイング・ストーリーリテリング及びそのフォローアップの 4 項目とした。また、対象の動詞は久野・高見 (2005) が DOC に用いる事が可能と示した 49 動詞を検索し、DOC と DC の新旧の情報の配置を調べ、情報構造の観点から適切な使用である、旧から新の DOC と、情報構造に関わりなく DC の目的語句の語数を計測した。

結果は、第一に学習者の DOC の情報構造別の産出状況は、旧から新の文が 47 文で、新から旧の文よりも有意に多かった。

第二に、DOC の IO と DO、DC の DO と to 句のそれぞれの句の長さについてカイ二乗検定の結果、DOC では二つの目的語句の間に有意差がみられ、残差分析の結果は期待値に対して、DO は 2 語以上の産出が多く、IO は 1 語での産出が多かった。

第三に、構文で受け手となる句への代名詞の使用状況は、DOC の IO は全 47 文中 43 文で、DC の to 句よりも有意に多かった。以上のことから、DOC の目的語句は DO の方が IO よりも長くなり、その IO の多くが代名詞で使用されている事が伺える結果となった。その上で、IO への代名詞多用について、対象とした 4 項目の IO と to 句への人称代名詞の使用状況は、IO はロールプレイングなどのやり取りを伴う課題で 1・2 人称の代名詞の多用がみられたのに対し、to 句では全体的に代名詞は使用されなかった。そのため、IO への代名詞の多用は、課題の内容だけではなく、構文が異なるためである事が示唆される結果となった。

今後の課題としては、データ数を増やすために複数の学習者コーパスを使用すること。目的語句の計測方法についても、語の長さを考慮するために音節数などを計測する手法の確立が求められる。

(上越教育大学大学院修士課程 2 年
2023年4月より
埼玉県立坂戸西高等学校教諭)

研究発表**英語科教職課程を履修する大学生の英語観に関する一考察
—2021～2022の追跡調査より—**

川崎 つぶら

本発表では、英語科教職課程を履修する大学生の英語観について調べるため、2021年度に第1回目のアンケート調査を行い、前年度の結果を踏まえ、2022年度に第2回目のアンケート調査を行った追跡調査の結果を報告した。

問題の所在として、トリニダード・トバゴ出身のALTが「日本人英語教師からアメリカ英語を話すことを強要された」という私信から、英語教育の現場では多様な英語を受け入れず、アメリカ英語を強要する一部の日本人英語教師がいることが窺えたことであった。この問題の所在から、英語教員を目指す学生が大学教育、および英語科教職課程で、アメリカ英語に偏った教育が行われているのではないかという予測をたてた。本研究の目的は、(1) 英語教職課程を履修する大学生が学ぶ英語圏の範囲 (2) 英語教職課程を履修する大学生の英語の多様性に対する意識 (3) 英語教職課程においてどのような英語観を身につけていくかを明らかにすることである。

首都圏で英語教職課程を履修する女子大学生2年生と3年生に調査に協力してもらい、アンケート調査を行った。まず、英語教職課程を履修する大学生の考える英語圏の範囲を調査するため、「英語」と聞いてイメージする国名や地域を自由記述で挙げてもらった。次に、学生の英語教員として生徒に英語

を教える際の英語観を、どのくらい重要に思っているかの重要度を5件法で調査し、相関分析を行った。2021年の第1回目の調査で明らかになった結果は以下の通りである。(1) 学生の考える主な英語圏は、アメリカ・イギリス・オーストラリアが中心であった。(2) 学生は世界の多様な英語をリンガフランカと捉え、自ら英語で授業を行うことを重要と考えていた。(3) 大学の学びから、世界の多様な英語があることを認識しながらも、英語圏の範囲は「狭義の英語圏」(森住 2020) の範囲であった。

2022年度の第2回目の調査では、学生の考える英語圏の範囲は2年生時と3年生時で大きな広がりは見られなかった。英語観に関しては、2021年度の2年生時に負の相関関係が認められた項目で、3年生時では同項目で強い正の相関関係が認められた。このことは、学生が2年生時では、「英語母語話者の発音を重要と考え、自分が英語教師として英語で授業を行う必要がない」と考えていたのに対し、3年生時になって「自分が英語教師として、英語で授業を行うことが重要である」と考えるようになったのではないか。また、2021年度と2022年度の3年生に共通して、強い相関関係が認められた項目から、「3年生になり、英語をリンガフランカとして捉え、自分が教師として世界の多様な英語を教えることが重要である」と考え

るようになったのではないか。結論として、学生の考える英語圏の範囲はアメリカ・イギリス・オーストラリアが中心であり、2年生時と3年生時に大きな広がりは見られなかった。しかし、学生は英語の多様性を認め、非母語話者と意思疎通が図れる英語力が重要だと考えていた。また、3年生は2年生に比べ、より英語の多様性を認識し、英語をリンガフランカと捉え、多様な英語を生徒

に教えることを重要と考えるようになったことがわかった。今後の課題として、アンケートのデータを多角的に分析し、より深く学生の英語観を検討すること、また、調査対象を他大学の英語科教職課程履修者に広げ、安定した結果を得ることを挙げる。

(和洋女子大学非常勤講師)

事務局だより

1. 会費納入・名簿整理について (重要)

会費の納入をお願いいたします。本学会では2020年度より会費納入は銀行振り込みに限らせていただいております。なお、お振込みにかかる手数料は会員のご負担になりますので、ご了承ください。お振込み時に発行される「控」が領収書に代わるものとなりますので、改めて領収書は発行いたしません。研究費処理などで問題が生じた場合には、本学会HPの「会則」第5条をご覧ください。幸いです。

https://73017e55-699a-4319-b4a0-46f79a6319aa.filesusr.com/ugd/68b70d_9f40b98972a54732a8a636ce07312f0e.pdf

書面での領収書が必要な場合は、事務局までご連絡をお願いいたします。

一般会員 4,000 円
学生会員 1,000 円 (院生を含む)
賛助会員 8,000 円

銀行口座：三菱UFJ銀行
国分寺支店 普通 0132870
口座名：日英言語文化学会事務局

2. 名簿記載事項について (重要)

名簿記載事項に変更がある方は、事務局までお知らせください。特にメールアドレスを変更されている場合は、すぐに事務局(ajelc@hotmail.co.jp)までお知らせください。事務局から案内やNewsletterをお送りするたびに、宛先不明で戻ってきてしまうメールが複数ございます。ご本人からお申し出がない限り、新しいアドレスにお送りすることができません。どうぞご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

3. 第18回年次大会

第18回年次大会を次の要領で開催いたします。

日時：2023年6月10日(土)

場所：Zoomと対面のハイフレックス

13:00 開会

13:00 会長挨拶

13:10-14:40 基調講演

「ことばを理解する」とはどういうことか—文学を編む英文法—編み上げられた文学をほどく—

講師：安井泉(筑波大学名誉教授)

14:55-16:25 対談

「日本の英語教育—過去・現在・未来—」

講師：

小池生夫(慶應義塾大学・明海大学名誉教授、本学会顧問)

奥津文夫(和洋女子大学名誉教授、本学会名誉教授)

16:25-16:30 閉会挨拶・諸連絡

16:30-17:00 会員総会

4. 定例研究会での発表者・講演者募集

定例研究会は、3月、9月、12月と、年3回の実施で、発表者および講演者を随時募集しております。自薦他薦は問いませんので、事務局までお知らせください。なお、発表は会員の方に限ります。

5. 紀要9号原稿募集

投稿予約は2023年6月30日(金)、投稿締切は2023年9月30日(土)となっております。ご寄稿をお待ちしております。詳細については、既にメールでお送りしておりますが、ご不明な点がございましたら、事務局までお問い合わせください。

6. AJELC 紀要掲載論文等の他の自著等への転載について (重要)

本学会の紀要に掲載された論文を会員が他のご自分の著作物に転載 (AJELC 紀要に掲載されたのち多少の修正を加えたものも含む) する場合は、特に問題が生じる場合を除き、以下に示した条件のもと紀要委員会の承認を経て許可するものとします。

- 1) 転載先の冒頭または末尾等に、「この論文は、20xx 年 x 月発行の日英言語文化学会紀要第〇号に初収されたもの (に著者が筆を加えたもの) である」等の断り書きを明示すること。

- 2) 転載前に事務局を通じてメール等にて AJELC 紀要委員会に転載の願出をすること。(書式は自由。ただし、転載先、おおよその発行時期、改変の有無および程度等具体的に知らせること。)

☆これまで AJELC 宛に転載の許可申請を済ませている方は、その分までは紀要委員会等で検討済みで、許可することになっておりますので、改めてご申請いただく必要はありません。

編集後記

先生方のご協力により、無事ニューズレター65号を発行することができました。原稿をお寄せいただきました先生方に心より感謝申し上げます。新年度を迎え、キャンパスでは学生が賑やかに集う日常が戻ってまいりました。そのような様子を見て、学生から刺激をもらっています。(Y.M.)

AJELC Newsletter 第65号

2023年5月1日 発行

発行人：小川貴宏

編集：日英言語文化学会 (AJELC) 広報通信委員会 江連敏和・山崎千春・青木理香・水澤祐美子

発行所：日英言語文化学会

(〒120-0045 東京都足立区千住桜木2-2-1 帝京科学大学 馬場千秋研究室内)

E-mail: ajelc@hotmail.co.jp